

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2008

課題番号：19520299

研究課題名（和文） トランスレーション言説の解釈学的戦略に関する研究

研究課題名（英文） Hermeneutical Strategies of Translation Discourses

研究代表者

吉村 正和 (YOSHIMURA MASAKAZU)

名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号：10033408

研究成果の概要：

本研究においては、トランスレーション研究の対象を翻訳テキストだけでなく解釈行為一般（記号法間翻訳を含む）に拡大し、その戦略のあり方を分析した。トランスレーション言説分析において、テキストの意味は確定できるという立場と確定できないという立場があり、そこにはキリスト教的な世界観とユダヤ教的な世界観というヨーロッパ世界における文明の対立構造が反映していることを、修正主義批評および20世紀初頭の抽象絵画の美学理論を対象として検証した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：(分科) 文学・(細目) 各国文学・文学論

キーワード：翻訳理論、解釈学、記号法間翻訳、神智学、誤読

## 1. 研究開始当初の背景

申請者は、平成17年度～平成18年度の科学研究費補助金(基盤研究C)の研究課題「トランスレーション言説分析と神秘思想の機能に関する研究」において本研究の前提とな

る諸問題を検討した。そこでは1960年以降の翻訳論の展開を、①ナイダとムーナンを中心とする意味の等価に依拠する翻訳論、②翻訳における文化の役割を強調したトランスレーション・スタディーズ、③原テキストが

すでに解体されていることを開示しようとしたポスト構造主義の翻訳論という3つの局面に分けて分析することにより、翻訳研究が言語とことばとの対立をめぐる、言語学、文学、文化学、哲学、芸術、神学から政治学までさまざまな学問が交差する場に位置していることを検証した。本研究においては、これらの諸問題を継続して検討を進め、さらに翻訳を解釈学的戦略の問題と関連付けることにより翻訳研究を深化させることとした。

## 2. 研究の目的

研究の目的は、まずトランスレーション・スタディーズ以降の翻訳研究に関する最新の成果を同化と異化という翻訳の文化的戦略の視点から捉えたうえで、トランスレーション研究における現代的課題を解釈学的戦略という視点から検証するところにある。解釈学的戦略は、言語自体の内在的な論理を志向するものであり、同化と異化において前提となる伝達の道具としての言語とは異なる言語観に道を拓くものである。翻訳の過程には解釈という作業が必ず含まれており、通常の場合は、言語から独立した外在的な意味の抽出とその再現を意図している。解釈学的な戦略においては、外在的な意味ではなく言語自体の内在的な論理を分析することを目指しており、同化と異化が文化的戦略であるとするれば、言語の原初的な意味とその神学的な役割を明らかにするという意味において宗教的戦略であるといえる。この戦略は、ヨーロッパ精神史においてユダヤ教的な思考法がいかに根強く存続しているかを明らかにするとともに、キリスト教の受肉した言語という見方とは根底において相容れない世界観が現代においても大きな影響を維持しているという事実を提示することになる。ある

意味において脱構築批評と重なる部分があるが、その最終目標を始原的言語（神的言語）による救済の解釈学の創出に置いている点において根本的に異なっている。本研究においては、翻訳を異種言語間翻訳だけではなく、記号法間翻訳にまで拡大して翻訳と解釈学的戦略の問題を解明する。

## 3. 研究の方法

解釈には、翻訳者が独自にもっている解釈コードが必要となる。解釈コードには、対象となるテキスト側に関わるものと、解釈する側（翻訳者）に関わるものの2種類がある。翻訳者あるいは批評家は、透明で中立的な視点から解釈を行うわけではない。翻訳者あるいは批評家には、それぞれの政治・経済・社会・歴史・宗教的な立場があり、対象となるテキストを解釈するさいには、翻訳者自身あるいは批評家自身の視点に関与してくる。ブルームの用語を使用すれば、翻訳者の解釈コードにはつねに誤読（misprision）という操作が介入してくる。詩人（＝翻訳者＝批評家）が先行する詩人を乗り越えようとするさいに、後発者の不安から必然的に誤読が行われるのである。後発者の誤読は新たなテキストとしての詩を創造する契機となることを、カバラー解釈学との関連から考察した。

## 4. 研究成果

翻訳には言説内翻訳、言説間翻訳、記号法間翻訳の3種類が存在しているが、本研究では、トランスレーション研究の対象を記号法間翻訳にまで拡大することにより、翻訳研究を単に言語学・文学的な分野に留まらず宗教・思想・芸術を含む広範囲な文化研究であると位置づけけた。具体的には、ベンヤミンの純粹言語に象徴される新しい翻訳理論の切り拓いた批評空間が翻訳という領域を超えて、ヨーロッパ精神史を分断する2つの思

潮の存在を浮き彫りにすることを、ブルームの修正主義批評に見られるユダヤ教解釈学とイエイツやカンディンスキーのモダニズム芸術に見られる神智学的解釈学の対比を通して検証した。神智学の神-美学 (theoaesthetics) はキリスト教解釈学に接続するものであり、言語を界面とする時間・空間的世界から無時間的・無空間的世界への超越を志向しており、ヴィジョンの開示を追求する。ユダヤ教解釈学は、無時間的・無空間的世界への超越を志向しながらも、ヴィジョンの開示には至らず、破局と創造の繰り返しによる終末へ憧憬に留まる。モダニズム芸術はロマン主義詩学の延長上にあり、伝統的宗教に代わるものとして救済の論理を探究したものであり、トランスレーション言説の向かうところも宗教的救済を強く含意するものであることを明らかにした。

(1) ブルームの批評理論は、修正主義 (revisionism) と呼ばれる。しかし、修正主義という訳語は、revisionism という用語にブルームが意図的あるいは無意識的に込めた意味を表現していない。確かに revision には、「修正」以外に「見直し」「改訂版」「改訳」などの意味がある。しかし、ブルームの revisionism は re-VISION-ism として解釈すべきである。直訳すると「再-ヴィジョン-主義」であり、そこには「幻視家 (visionary)」と呼ばれたブレイクとW・B・イエイツの『ヴィジョン (A Vision)』(1925) への連想が含まれていると思われる。イエイツが『ヴィジョン』においてキリスト教に代わる神智学的解釈学を提示して、モダニズム詩学の救済の論理を展開したのに対して、ブルームは、フロイトの精神分析やユダヤ教神秘主義カバラを駆使することにより、伝統的な批評理論の「再-ヴィジョン」化を目指したのである。その場合、ユダヤ教神秘主義カバラは、

いわゆる「修正主義批評」の解釈技法を知ろううえでもっとも重要な理論となることを考察した。

修正主義批評の重要な概念となる「後発性 (belatedness)」という発想もカバラの文脈から生まれてくる。ルーリアの「収縮」「容器の破壊」「修復」という3つの局面は、「限定化」「代置」「再現前化」という批評用語に置き換えたかたちで修正主義の戦略が構築される。ブルームは詩の創造過程に関する6つの修正的公準 (revisionary ratios) を想定しているが、6層構成という発想そのものはもう一人のカバリスト、モーセス・コルドヴェロのベヒノト理論に由来する。コルドヴェロは、セフィラーの中にセフィラーを反映するという発想を展開し、セフィロトの無限の局面を表わすベヒノトという概念を創出した。このベヒノト理論が修正主義批評に重要な意味をもつのは6層構成という形式だけではなく、この原因結果関係が逆転して結果から原因へという方向性を示している点にある。後発性は、先行するテキストの結果ではなく、その原因ともなりうるという発想がここに生まれる。後発のセフィラーが先行のセフィラーに隠されている局面から出発して、独立し、自らの内に隠されたセフィラーを流出させる力を得て新しいサイクルを始めるが、このプロセスは、テキストの解釈過程のモデルとみなされるのである。

(2) カンディンスキーは、物質的な対象を観察してそれを模倣することを目的とする芸術を再現的芸術と呼んで退けた。再現的芸術に替えて彼が提出したのは、精神的なもの、あるいは内的なものをそのまま表現する芸術であり、いわゆる抽象絵画であった。抽象絵画の制作者は、さながら透視能力者がアウラや思念形態を視認するように、精神的なものを観察し、それを色彩と形態を通して表

現しなければならない。そのさいにカンディンスキーの依拠した概念は、「内的必然性」である。内的必然性の作用は芸術の発展の原動力として、時間的・主観的なもののうちに自己を表現することになる。

神智学によると、人間がメンタル体などの高次の境域に進むにしたがって高次の霊的視覚と霊的聴覚が啓けてくる。霊的視覚と霊的聴覚を通して表現される感性は、エーテル体やアストラル体などの境域で知覚する地上的な色彩や形態あるいは旋律ではなく、さらに繊細で微妙なメンタル体の感受する情感である。それは可視的な境域を超えて広がる世界であり、太陽光線や空気の震動とは異なる精神的な震動を通して発信され感受されるものであり、宇宙の震動と共振する性質をもっているという。

カンディンスキーの抽象絵画は、画家、作品、鑑賞者の間に一種の精神感応が生まれるという仮説に基づいている。人間の感情や情緒の本質は精神の震動であり、画家、作品、鑑賞者はこの震動を通して繋がるのである。人間の意識は進化して高次の境域に進むにしたがって、宇宙のより深い部分の震動に感応することができる。精神感応は一般に、感情や情緒の動きに応じてアウラが震動して、その震動が相手のアウラに感応して伝達されるという図式によって説明される。神智学の場合には、感情や情緒の動きに応じてアウラが震動すると、感情や情緒の型に応じて一定の形態が組織されると考える。カンディンスキーは内面の震動を、自らが制作する作品の色彩と形態を通して具体的な形式へと組織化しようとしたのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[その他]

吉村正和、「言葉の翻訳と文化の翻訳を超えて」、国際言語文化研究科公開講座『言葉と文化の国際交流』、2009年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉村 正和 (YOSHIMURA MASAKAZU)  
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授

研究者番号：10033408